

研究結果報告書

日本語を主専攻とする中国人大学生の音韻習得研究

所属：華東師範大学
役職：准教授
氏名：尹 松

本研究は、中国の日本語専攻の大学生を対象に、ディクテーションという方法を用いて、縦断的に音韻習得の過程を観察し、習得の困難点を明らかにした。具体的には、2年次の第一学期から3年次の第一学期まで、宿題として、学生に聞いた内容をすべてディクテーションをさせて添削し、音声言語と文字言語の不一致や誤聴を可視化した。使用材料は2年次では、市販の教科書の聴解セッション、3年次では、生のラジオドラマやテレビドラマを使用した。漢字などの間違いを除き、聞き間違いがあると1回の誤聴とする。分析した結果、以下のことがわかった。

(1)誤聴と判明できるものとして、濁音と清音の混同、促音、母音の[e]と[i][a][o][u]の混同、長音と短音の混同、助詞「は」と「が」の混同が3年次になっても目立つ。

(2)「そうか。移転し場品のつき込み費なくちゃいけないの（正：倉庫に行って商品の積み込みにいかなくちゃいけないの）」のような分類できない誤聴は3年次になっても依然として4割くらい残る。

(3)上記の誤用は留学経験者にも見られ、学習環境が音韻習得に及ぼす影響が見られなかった。

以上のことから、学年が上がり、日本語能力が向上しても、留学経験があっても学生には正確に知覚できない音韻がまだ残り、音韻習得がある段階で止まっていることがいえる。日本語母語話者は自然な発話の中で、母音の脱落や長音の短音化など、音変化をしている、そういう発音の恣意性や、[e]のような同じ母音でも、発音上簡単に言い換えられない、そういう母語と目標言語の相違などが、誤聴の原因だと考えられる。耳で知覚できない場合は、頭で「聞かせる」というように、今後授業で意識的に音声知識を教えることが重要だと示唆された。これから分類できなかった誤聴について更なる研究を重ねていきたい。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

題目 1：音声知識を取り入れた聴解授業の試み

発表者名： 尹松

会議名： 第十回国際日本語教育・日本研究シンポジウム

日時： 2016年11月19日～ - 20日

題目 2 日本語専攻の中国人大学生における聴解授業の現状

発表者名： 尹松

会議名： 実験のプロセスを協同で振り返る - 語る・聞くから省察へ -

日時： 2017年3月11日 - 12日

場所： 玉川大学

発表予定

1. 2017年9月7日～10日 吉林大学 海峡两岸外国語教育シンポジウム

発表題目 聴解授業の在り方について

2. 2017年10月14日～15日 文教大学 第5回日中韓言語文化国際シンポジウム 日本語専攻の中国人大学生における音韻習得の問題点

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

投稿予定

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）